

下関西高等学校 進路だより

令和5年12月号 進路指導部

～3年生は本番に向けて追いこみです！！～

唐突ですが、国内の18歳人口は1993年度までは200万人を超えていました。それが2025年度には109万人まで減少しました。その一方で国立大学の募集人員は増加しています。つまり、数字的に見ると明らかに国立大学は入学しやすくなったと言えます。本校は国立大学への志望者が多いですが、その事も念頭に置いて受験戦略を考えてください。今回は本校からの志望者の多い難関国立大学と中国・四国地区の国立大学の動向についてのトピックを紹介します。なお、志望者指数とA、B判定を獲得した上位者指数は第1回駿台・ベネッセ模試の値です。

1 難関国立大学について

国立大学(東大、京大、北大、東北大、東工大、一橋、名大、阪大、神大、九大の難関10大学について)

難関10大学で昨年より志望者を増やしたのは、東北大のみで9大学では全て減少となっていますので、難関大学を志望している生徒は模擬試験で判定が出ていなくても諦めないことが大切です。今年度の難関大学の人気系統は文系では経済学部、理系では医学部医学科と農学部です。難関大学でも卒業後の進路が比較的イメージしやすい学部で志望者が増えてきています。

- ・**東大**は理Ⅲ以外の志望者指数が大きく減少しています。文Ⅰは志望者指数84で大幅減少していますが、特に上位層の減少が目立っています。高校入学後からのコロナの影響を受けている生徒が多いためか模試の判定が全体的に良くないです。昨年度において二段階選抜が実施されなかった、文Ⅱ・文Ⅲは今年度も上位層は少なくなっています。理科系では理Ⅰが志望者指数96と低くなっています。昨年度入試でも駿台予備学校は二段階選抜における共通テスト足切りラインを690点と判断されましたが、結果的には共通テスト540点でも受験ができています。理Ⅱも志望者指数84と大幅減少となっていますが、こちらは共通テスト後の理Ⅰ志望者の流入が例年、多いので注意が必要です。理Ⅲは今年の志望者指数112と人気が高いですが、上位者は少なく、模試ではほとんどの志望者がD判定となっていますので強気の出願が必要だと思われます。
- ・**京大**は経済学部文系が前年比95とやや減少していますが、下位層の減少が大きくなっており、上位層は堅実に集まっていますので、昨年度並みの難易度と言えるでしょう。共通テスト後に経済学部から文学部、法学部、教育学部に志望変更する生徒も一定数いますので志望を貫く姿勢も大切にしてください。工学部は志望者指数104と3年連続増加となっています。人気系統の情報工は志望者指数97とやや減少していますが、建築学科は108、理工化学112、地球工115と学科によっては志望者が集まっています。工学部は第2志望まで書けるので出願戦略が重要となります。昨年度入試の最低点は高いほうから情報、物理工、建築学、電気電子工、地球工、工業化学となっていますが、情報と工業化学では総合得点で80点以上の開きがありますので第2志望をどう位置付けるかがポイントとなります。農学部は志望者指数101と前年並みですが、学科別では地球環境が90と現在のところは人気がありません。しかし、農学部も第6志望まで書けるので今後の動きに注意が必要です。なお、得点開示から理学部は数学と理科、薬学部は国語と英語が得意な生徒が合格している傾向が見られます。
- ・西高からの志願者が多い**九大**は前後期とも志望者指数は減少しています。まず、文学部ですが、志望者指数は97とやや減少していますが、昨年と比較すると中上位層の人数がやや減少しています。法学部も志望者指数は90と減少しています。ベネッセ駿台模試では偏差値60前後で減少し、易化傾向を示していますので志望を貫くことが大切です。経済学部は志望者指数96とやや減少していますが、中上位層で人数が増えているので激戦が予想されます。経済工学科は志望者指数90、上位層のみならず、幅広い偏差値帯で減少していますのでチャンスが大きい年になりそうです。教育学部は志望者指数96とやや減少していますが、減少しているのが下位層で、中上位層は昨年並みなので注意が必要です。共創学部の志望者指数は97とやや減少していますが、こちらも下位層での減少で、上位層は増えてい

(次のページへつづく)

るので同様に注意が必要です。理学部はほとんどの学科で志望者指数、上位者指数がともに上昇しています。志望を考えている生徒は二次試験に向けて十分な準備をしてください。学科別では物理が難化、生物が易化傾向を示しています。工学部は過去3年の入試結果を概観すると、合格者最低点が最も低いのはVI群となっています。一番人気のI群は志望者指数93とやや減少していますが、これは中位層の減少が影響しており、やや易化の傾向を示しています。II群は志望者指数108と増えていますが、こちらは模試の判定が低いチャンレンジ層の増加となっています。III群は志望者指数94で上位層が増加していますが、中位層は減少しています。IV群は志望者指数96でこちらは上位層の減少が目立っています。九大工学部に執着する生徒はこの学科が狙い目です。V群は志望者指数103で中位層の減少が目立つので志望を貫きやすい動向となっています。VI群も志望者指数は98で中位層の減少が目立っています。芸術工学部では音響設計コースの合格者最低点が最も高いですが、今年の模試では志望者指数90と減少しています。ただし、上位層は増加しており、志望者が減少しているのは中下位層となっていますので引き続き激戦となりそうです。メディアデザイン学科は志望者指数98ですが上位者は指数133と難化が予想されます。環境設計は志望者指数が95とやや減少傾向で特に中位層の減少が目立ち易化すると予想されています。インダストリアルデザイン学科は指数100ですが上位者指数は157と大幅に上昇しており、難化しそうです。医学部医学科は指数94となっていますが、上位層はやや増えています。保健学科看護学の志望者指数は98でこちらは昨年度とほぼ同じ傾向をたどっています。歯学部は志望者指数104とやや増加しています。特に上位層の増加が目立ち難化傾向を示しています。薬学部では創薬学科は志望者指数95とやや減少しています。上位層も薄く今年はチャンスの年になりそうです。一方の臨床薬学科は志望者指数92と減少していますが、上位層は厚いので創薬学科と逆に油断大敵です。農学部の志望者指数は101と前年並みですが上位層はやや増加しています。

・**阪大**は全体の志望者指数は95と減少傾向を示しています。コロナ禍で不人気系統となっている外国語学部ですが、志望者指数は96と減少傾向は継続しています。外国語学部は専攻による難易が異なりますが、専攻別で比較すると欧州系言語専攻は倍率が低いです。アジア系言語専攻は倍率が高いですが成績レベルは低い傾向にあります。昨年度は志願倍率が1倍台の学科もいくつかありましたが、特にインドネシア語専攻は募集人員10名に対し、受験生10名、競争倍率1.0という驚きの結果となりました。とにかく阪大で外国語を学びたいと考える受験生が専攻を選ぶ時には各専攻の最低得点推移、倍率推移、募集人員に注目する必要があります。今年も難易度が上昇する可能性は低いと予想されていますが、こちらは二次試験の配点比率も77%と高く、特に英語の配点が高いことを考えると英語が得意な生徒であれば、諦めずに取り組めばチャンスは大きいと思われます。経済学部は志望者指数103で上位層もやや厚いので注意が必要となっています。配点が3つのパターンに分かれやや複雑なので募集要項で確認をしておいてください。工学系統では工学部が志望者指数91、基礎工学部も94といずれも減少傾向となっており、特に中位層の減少が目立っています。

・**神大**は人気系統の経済学部は志望者指数97とやや減少していますが、上位が集まっておりやや難化すると予想されています。経営学部も志望者指数は経済学部と同様に97とやや減少していますが、こちらも上位者が集まっており注意が必要です。国際人間科学部のグローバル文科学科は例年、人気の高い学科ですが、上位層で人が集まっているので注意してください。海洋政策学部の理系募集も上位層が厚く難化が予想されていますし、共通テスト後の流入があるので注意が必要です。

・**東工大**の学院別志望動向は環境・社会理工学院を除く全ての学院で増加となっていますが、上位層は全学院で減少していますので積極的な出願が大切です。ただし、女子枠に関する募集人員の動向などに注目しておく必要があります。

・**一橋大**は注目の新設2年目のソーシャル・データサイエンス学科が昨年の模試の実施段階では受験生への周知が遅れていましたが、今年度は周知も進み志望者が増えています。ただし、難化はしていないようです。また、この学科は理系からも受験可能で昨年度入試では後期の合格者のほぼ全員が理系志望者でした。経済学部は全体で大幅に増加しており、特にボーダーライン付近の志望者が増加しているようですが、こちらも難易度に変化はありません。法学部は志望者が減少していますが、成績上位層の増減も小さく難易度の変化はないと予想されています。

(次のページへつづく)

- ・**北大**の文系では教育学部が志望者指数126と大きく増加していますが、それ以外の学部は減少しています。特に文学部と総合入試文系の志願者が少ないのが特徴です。また、総合入試は道内志願者が3割程度と低く全国から受験生が集まってきています。理系では水産学部が志望者指数112で2年連続志願者が増加しており、上位者も集まり難化傾向を示しています。総合入試の理系はいずれのカテゴリーも減少していますが、今年度は募集人員が984名から50名増加し、1034名となりますのでチャンスが拡大しています。特に生物重点受験は志望者指数が81と大幅に減少していますので狙い目です。理系における後期合格者の前期受験大学は水産学部、獣医学部以外は東大で、最近はほぼ50%強の受験生が前期で東大不合格、後期北大合格となっています。
- ・**東北大**は前期の志望者指数が102と難関大学では唯一増加しています。文系は文学部以外で減少していますが、特に法学部の志望者指数が83と大幅減少となっています。法学部はこれで3年連続の志望者減少となっていますが、特に中下位層が激減しています。上位層は増えていますが、総合型選抜でこちらの層は抜けていくので心配はありません。評価が高い工学部も志望者指数は101と増えていますが、こちらは募集人員が増えているのでチャンスは広がっています。特に人気が高い機械航空学科は志望者指数105と高くなっていますが、やはり総合型選抜で合格となった生徒が一般選抜には受験に来ないので、昨年並みの難易度と考えて問題はないと思われます。医学部医学科は志望者指数113と高めで、上位層から中下位層まで人気が高く難化が予想されています。薬学部も志望者指数108と増えていますが、上位層は減少しているので、ここからの頑張りが勝負の分かれ目と言えます。農学部は志望者指数114で人気も高く、中上位層が増えており完全な難化予想となっています。
- ・**名大**の文系学部では文学部の志望者指数が2年連続で減少していますが、倍率は2倍台の安定した入試になると予想されています。教育学部は個別試験の配点割合が高いので共通テスト後の流入に注意が必要です。経済学部は志望者指数82と大きく減少していますが、成績上位層の減少は見られないので要注意です。情報学部コンピュータ科学科は志望者指数88と減少していますが、上位層は増えていきます。工学部では人気の高い機械航空宇宙学科の志望者指数はやや減少していますが、学力分布をみると下位層での減少が目立つため、入試難易度への影響は少ないと考えられます。また、同じく人気が高い電気電子情報学科は志望者指数97と落ち着いた動向となっていますが、京都大学や大阪大学の志望変更先として名大を選ぶ受験生が増加しており、今後の志望動向に注意が必要です。農学部人気は名古屋大学でも同様で志望者指数132となっており、上位層が厚く激戦が予想されます。

2 中国四国地区国立大学の動向について

- ・**岡山大**は全体的には上位者指数が125と高くなっている点に注意が必要です。法学部、経済学部志望者は模試ではボーダーライン上が厚くなっており、チャレンジ層にとっては厳しい状況になりそうです。共通テスト後は大阪公立大学の志望者流入に注意が必要となります。理学部は志望者指数93とやや減少しています。神戸大学理学部との併願関係が強いので共通テスト後の神戸大学志望者の動向に注意してください。特に昨年度は共通テスト560点から590点が合否の混在ゾーンとなりましたが、ベネッセ駿台記述模試では偏差値55以上が出願の目安となります。工学部は新設の「情報工学先進コース」に志望者、上位者ともに集まっています。他の学科を志望している生徒は志望者、上位者ともに下がっているためチャンスと捉え、粘り強く取り組むことが大切です。昨年度からの岡大後期日程廃止や教育課程変更による安全指向に伴い、近隣の香川大、愛媛大の後期日程の志望者が増加していますので両大学との併願動向にも注意してください。
- ・**広島大**は法学部が志望者指数108と人気が集まっています。特にベネッセ駿台記述模試における偏差値50台の層が増加しており、例年よりチャレンジしようとしている生徒が多いことが理解できます。直近3年のベネッセ駿台記述模試では偏差値55以上あれば合格率がおおよそ6割を超えていますので強気の出願が大切です。一方で、広島大学・法学部を前期・後期通して受験をした場合の合格率は17%と低くなっています。広大法学部への志望が強く、浪人も視野に入れて挑む場合は問題ないですが、それ以外の生徒は慎重に出願を進めていく必要があると思います。教育学部の志望者指数は生涯/健康スポーツ106、生涯/人間生活124、生涯/造形芸術109と生涯系における増加が目立っています。また、学校/初等教育91、科学/技術情報71、言語/英語文85、人間/心

(次のページへつづく)

理学85など全体的には減少している学科が多いです。理学部は昨年度入試で前期・後期を拡大で通し受験した場合の合格率は0%でしたので、併願校の選定には注意が必要です。工学部は合否混在ゾーンが広く逆転可能性が高いので十分な二次力を身につける必要があります。また、ベネッセ駿台記述模試では偏差値50台後半であれば3か年通じて合格率が6割以上と高くなっています。なお、後期日程では岡大後期日程廃止の影響で岡山、愛媛両県からの志望者が増えています。

- **山口大**の人文学部は志望者指数92と低くなっていますが、難易度に変化は見られません。経済学部は志望者指数89と減少しており、中上位層の志望者も少ないですが、共通テスト後に岡山大学、広島大学志望者の流入があるので注意してください。経済学部は模試の偏差値40台後半からの合格者も多く、個別試験での逆転もあるので諦めないことが大切です。教育学部は実技系、特別支援以外は軒並み志望者が減少しており、模試の上位層も少ないのでチャンスは十分あると考えてください。国際総合学部は志望者指数89と低いですが、上位者は増えているので注意してください。理学部では地球圏システム学科が志望者指数83、上位者指数64と低くなっています。募集人員が15名と少ないですがチャンスは大きいと考えられます。工学部は直近2年のベネッセ駿台記述模試では偏差値が40台後半でも合格率が50%を超えています。二次試験での逆転合格もかなりあるので共通テストで判定が良くても油断しないように十分に準備をしてください。医学部医学科の志望者指数は98と前年並みですが、上位者指数が149となっており、一般選抜もハイレベルの争いとなりそうです。農学部の志望者指数は98と前年並みですが、こちらも上位者指数が144と高くなっています。
- **鳥取大**の地域学部は志望者指数91と減少していますが、上位者指数は114とやや増えています。工学部は志望者指数93、上位者指数84と易化傾向となっていますが、岡山大学からの流入に注意してください。島根大学と重なる学部系統では隔年現象も見られるので、山陰地区の志望も視野に入れている生徒は共通テスト後にしっかり分析する必要があります。
- **島根大**の法文学部は志望者指数95とやや減少していますが、B判定の偏差値54付近の層が増加傾向にあり、特に第一志望で島根大・法文学部を選んでいる人数は昨年から倍増しており、この傾向が継続すれば難化すると予想されています。昨年度入試でも岡山大学法学部、文学部からの共通テスト後の流入者が32名いたので注意が必要です。総合理工学部は全体で志望者指数108とやや増加していますが、動向については昨年度と同じ傾向を示しています。
- **徳島大**の総合科学部前期はチャレンジ層が減少していますが、一方で上位者は増加しています。偏差値40から44の志望者は減少していますが、上位者指数は155と非常に高くなっていますので注意してください。理工学部は学部全体での志望者指数89、上位者指数96とともに減少しています。昨年の第1回ベネッセ・駿台大学共通テスト模試の偏差値45以上での合格率は50%と高くなっています。
- **鳴門教育大**は全体の志望者指数は97とやや減少していますが、上位者指数は111で増加しています。各学科の定員が少なく志望動向もばらつきが大きいので志望を考えている生徒は今後の動向に注意が必要です。
- **高知大**は昨年度入試では軒並み1倍台と競争緩和の年でしたが、今年度は隔年現象が顕著で人文社会学部、教育学部で上位者が増加しています。特に人文社会は模試のB判定値以上の志望者が増加しています。共通テスト後に岡山大学などのチャレンジ層や併願関係の強い愛媛大学法文学部からの流入も考えられるので注意が必要です。
- **香川大**では経済学部の志望者指数は97とやや減少していますが、上位者指数は129とかなり増加しています。共通テスト後の岡山県内における岡山大学志望者の流入が経済学部に限らず多い大学なので出願の際には注意が必要です。創造工学部全体の志望者指数は96とやや減少しています。上位層指数は100と前年並みです。今のところ岡山県内からの志望者は昨年度より30名少ないです。
- **愛媛大**は地元占有率が特に高い大学ですが、法文学部全体の志望者指数は99と前年並みです。ただし、B判定偏差値54以上の上位者は増加しています。工学部も志望者指数は前年並みですが、上位者指数は104とやや増加しています。

以上です。年明けに今回報告できなかった医学部医学科、私立大学、九州地区国立大学の動向について掲載しようと思います。受験生は年末年始返上となりますが頑張ってください。(文責・松村)